

道南地区伝道協議会発題 「伝道する教会の形成～身近な人を教会へ～」

日本キリスト教会遠浅教会
牧師 河野 美文

はじめに

「2015年の中会伝道協議会の学びと、信徒大会での示唆を受けながら、伝道の進展を願いつつ新たな思いで学び、考え、語り合いましょう」という今回のスローガンを受けて、2015年度の中会の伝道協議会を振り返りました。そこでは、D・G・ブローシュの「教会の改革的形成」を主なテキストとして来ました。「個人的な信仰の回復」、「教会の礼典的要素」、「教会の新しい形態」、「長老制の歴史」、「長老制の課題」などの項目を考えて参りましたが、今回は、その後9月に行われた日本キリスト教会信徒大会を受けて、この道南地区の伝道、ひいては、北海道中会や大会における伝道にも関わる事柄を考察して行きたいと思います。

今回は、信徒大会の分科会で示唆を受けた日本伝道に関わる特別な宣教論について、これまでの学びと合わせて、これらを中心に学びたいと思います。現在、多くの教会で伝道に困難を感じ教勢が停滞し、教会が力をなくしていることは確かです。全ての兄弟姉妹が危機感を共有することの重要性を覚えます。個々の教会の直面する問題と、全体教会が直面する問題は性質が異なることも考えなければなりません。個々の教会の一部が栄えても、それは全くの自己満足に過ぎないからです。個々の教会は、あくまでも、全体教会の一部であるにしか過ぎないのです。従って、私たちは、個々の教会の形成や、その相互の伝道協力を考える上においても、「**全体教会**」の形成を常に考えなければなりません。それこそが、即ち、イエス・キリストの御体なる普遍的教会だからです。

(1) 伝道のための現状分析

(a) 世俗主義

日本では、伝道は難しい状況にあり、教会も信徒も苦戦していると言わなければなりません。原因は教会の外部にもありますが、それだけでなく、教会の内部や教師・信徒の中で、伝道する力が弱まっていることにあることを認識して、祈って乗り越えさせていただく必要があります。しかし、それにしても、伝道が困難な理由は、日本社会や、日本の現代文明一般の状況の中にもあります。多くの人々の関心が、経済的豊かさや身体的な健康、娯楽、快楽に時を過ごすことに流れているからです。一言で言えば、それは「**世俗的**」ということが出来ます。そういう訳で伝道の困難さの背景には、現代日本社会と、日本人の強い世俗的な関心、即ち、「**世俗主義**」があると云っても良いのではないのでしょうか。それは、今日においては、無宗教化というところまで進んでいます。

(b) 日本的風土

また、「**日本教的風土**」、もしくは「**日本主義的風土**」とでも言うべき状況が日本社会にはあって、キリスト教に対して依然として排他的な感情を醸し出しています。一方に世俗主義が強固な仕方であり、他方それと共に民族や地域を規定する従来型の宗教がなお存在するというのは、日本だけでなく、イスラム諸国やヒンズー教のインドなどの地域でもそうです。これらの両方に直面しながらキリスト教伝道は進められなければなりません。かつて、明治の頃から日本に伝道してきた人々は、「**敬虔主義的信仰復興運動**」の力に支えられて来ました。しかしそれがキリスト教会の中に、そして、牧師や信徒の中に減少して、逆に、「**世俗主義的な関心**」の影響力が力を増してきたように思えます。この「**敬虔主義運動**」や「**信仰復興運動**」は、キリスト教会の歴史の中に何度も訪れてきたものです。それが又、経済の発展と結び付いてきたことは、裏腹なことです。

(c) 伝道的キリスト教

従って、世俗主義的な関心に規定されたライフスタイルから解放されて、いかにして敬虔主義的信仰復興運動が持っていたライフスタイルと、その信仰の長所を取り戻すかという問題が課題としてあります。それは、主日礼拝を保つだけでなく、生活の全体を完全にキリスト者であることに情熱を傾けさせます。そこから、社会の中に取り残された人々のための慈善の行為や、教育活動も現れます。取り分けそれは「**伝道的キリスト教**」として発揮されました。今その「**伝道的キリスト教**」の回復が必要とされているのです。そこには、常に経済的弱者への配慮があります。

(d) 教会の伝道

伝道は、個人としてのキリスト者がするというよりも教会がするものです。教会は、伝道のために集められ、また派遣されていると言うべきだからです。従って、教会形成のために伝道があるのではなく、逆に、伝道のために教会形成がなければなりません。このことも「**伝道的キリスト教**」のためにはわきまえるべきことです。そして、そこには教会の経済的自立が伴います。

(2) 教会が真の教会であるために

(a) 伝道と教会

伝道は、福音を伝え信仰を伝えるのですが、人々を礼拝する者として礼拝の群れに新たに招き、教会へと迎え仲間として加えます。ですから伝道のあるところ教会が踏み出しており、教会が成長を示すことになります。教会と伝道の間には、教会が伝道し、伝道は教会を更に成長させるという「相互関係」がある訳です。教会がなければ伝道は出来ず、伝道なしに教会は存続しません。伝道を学ぶことと教会を学ぶことが切り離せない訳です。

(b) 拠点としての教会

信仰生活を生きることは、いつでもこの世の戦いの中にあります。まして伝道を進めていくことは古い習慣や価値観や規制がある中で、あるいは世俗主義的な関心の中で、戦場に行くようなものです。その時、信仰者を戦いの渦中で支え、慰め、励ます拠点がが必要です。私たちが希望を新たにし使命を覚えて生き続けるには、慰めと勇気づけが必要です。そのとき教会は私たちの信仰生活・証しの生活の拠点であり、試練の中の砦であり、慰めと癒しの機関です。更に言えば社会における超越的な意味や励ましの支持的根拠です。そういう教会が、人間と世界にとって、また、その中で伝道がなされるために必要です。

(3) 伝道は何を伝えるか

(a) 福音とは何か

イエス・キリストの事実—イエス・キリストの人格、その言葉、病人を癒し、罪人を赦す御業、そして、主イエスに起きた十字架と復活の出来事—その全体が、福音の内容と言って良いでしょう。聖書は、それを伝えています。ですから、聖書の証言に従いながら、その内容をそれぞれの時代に、それぞれの人に、生き生きと、語り伝えるのが伝道です。説教をはじめとする教会の言語表現は、この福音を伝える使命を負っています。聖書は、この福音を証言していますから、福音を伝道するには聖書に即して伝えることが重要で、聖書は信仰と生活の基準であるように、伝道の基準です。聖書そのものが、伝道しているとも言い得るでしょう。しかし、聖書を聖書らしく読むには、福音信仰が必要です。福音の信仰なしに聖書を読んでも、聖書を、本当に読んだことにはなりません。その意味では、福音の伝道は、福音主義的に、そして、聖書主義的に進められなければなりません。

(4) 教会と世界を形成する神の言・キリスト

(a) 伝道の主体

伝道の主体は、イエス・キリスト御自身であることを、先ず、覚えます。また、その内容である「福音」、即ち、「喜ばしい訪れ」も、イエス・キリスト御自身です。何故なら、復活・昇天された、イエス・キリストは、神の右に座して全世界を支配される王の王、主の主であられるだけでなく、御自身をあらゆる時代の全ての人々に対して、「福音」として告げ知らされる「啓示者」でもあるからです。キリストは、御自分が「福音」であり、神の人間に対する語りかけ、即ち、たった一つの救いの「言」として、福音を語られるのです。キリストは、この預言者職の遂行において、教会の内でも外でも、聖霊と共に働かれ、全人類に御自身を証しし、救済史を完成されます。そして、それが、同時に、「世界史」を真に意義あらしめ、完成へともたらずことともなります。私たちキリスト者は、その御業に仕える者として、キリストと共に働くのです。正に歴史は、キリストを現し、キリストは歴史において現されます。

(5) 伝道する教会の形成

(a) 伝道共同体としての教会

教会はキリストの福音を宣べ伝えるために、主によって建てられています。即ち、教会は主から、「礼拝共同体」として召命を受けて集められた訳ですが、それは同時に、「伝道共同体」となるように、と主から「召命」を受けたことを意味します。この意味での「伝道する教会」が実現する為に、教会は、どのような精神に立脚し、どのような教会形成を、目指されなければならないのでしょうか。先ず、初めに、私たちの教会の歴史を踏まえ、その最初の最もオリジナルな理念であった、「**自伝・自立(自律を含む)・自給**」の三つの概念から改めてもう一度考え直す必要があると信じます。「自伝・自律・自給」の理念は「**公会主義**」という超教派的な教会観と固く結び付いて、日本における教会形成の基本精神を形成していたと言えます。そして、これこそが、150年前に宣教師たちが教えた精神だったのです。初めに私たちは、この精神が日本のプロテスタント教会の中に、少なくとも最初の十数年間は、実在していたことを確認したいと思います。次に、それが聖書の教会理解と合致し、かつ、宗教改革の三大原理の一つ、「**万人祭司主義**」とも一致していることを確認したいと思います。

(b) 自伝・自律・自給

先ず、「自伝・自立・自給」は、信徒が皆、自分で聖書を読んで「自立」した信仰を持ち、経済的にも「自給」でき、やがては、自分たちの力で祖国を「自伝」し、世界に宣教師を派遣出来るような教会に育つという、初代の宣教師たちの願いであり、日本の信徒たちも、強くそれに共鳴していたことでした。この場合、「自伝・自立・自給」の精神は、信徒が直接聖書を読んで、自立して信仰を持つことの上に基礎を置いています。これを全体的な教会に当てはめたとき、外国のミッションからの独立の為に、植村正久の日本人自身による超教派的な神学校の設立がありました。植村正久による東京神学社の設立(1903年)は、このことに最も深い動機がありました。言うまでもなくこの「自伝・自立・自給」の精神と「超教派的教会形成の理念」(公会主義)とはお互いに切っても切れない関係にあります。しかし、この精神が、日本の教会には根付かなかったのです。日本の教会のその後の発展の仕方が、教職中心の「神学する教会」として形成されていったことは、実はその結果であったとも言えるのです。それはまた、信徒の間における教会論的な未熟さにも原因がありました。

(c) 新約聖書の教会形成

以上の歴史的考察を踏まえて、次に、私たちが考えなければならないことは、このような「自伝・自立・自給」の伝道精神が、新約聖書の教会形成と伝道の精神に全く合致しているということをはっきりとすることです。また、教会の本来あるべき本質的な要素が、宗教改革者ルターが重んじた「万人祭司」の原理によって、再び明確にされたことだけは鮮明にしておかなければなりませんし、論証するに困難なことではありません。また、その原理が宗教改革者カルヴァンが重んじた「教会訓練」の理念によって、補強され、完成されるものであることも同時に明らかにされます。そこでまず、神が教会をお建てになるとき、必ず、そこに住む信徒たちを集めて「礼拝共同体」を形成する道をお選びになったということです。その為には、信徒たちの主体的な参加が常に根底になれば、教会は成り立たないということです。パウロの伝道旅行を見ると、教会は教職や定住伝道者がいなくても、「御言葉の聴従」という出来事さえ確保されるならば、それを中心に礼拝共同体が形成され、それが同時に「伝道共同体」となって、更に、周囲の人々を集め、発展するという原則が、ここから見出されます。その要にある出来事が、「御言葉の聴従」です。そして、この出来事自体は集まった人々が聖書を輪読し、証しをし合い、祈り、神を讃美すればそこに起こり得るものです。その様に、集められた「神の民」として行う礼拝に、参加したいと願うようにさせることが、「伝道する教会」を形成し、「伝道」を盛んなものとするために働かれる、御霊の最も重要で基本的なお働きです。

(d) 信徒たちの働き

信徒たちが教会形成の主体となることによって、教会が、誕生し、形成され、伝道が盛んになる手助けをするという考え方が、新約聖書の最も基本にある教会観なのではないでしょうか。これまでのような、教職中心主義では、早晚、教職不足に陥り、小さな教会は、消滅せざるを得ません。各個教会の形成に関しては、聖書の考え方に従い、信徒中心に発想を切り替える必要があります。なお、このような意味において、教会形成の主体は信徒一人ひとりであるという考え方(万人祭司主義)は、これまで述べられてきた「御言葉中心主義」の教会形成観と少しも矛盾するものではありません(と言うのも、信徒一人ひとは、聖書をよく読み、祈らなければ教会形成に加わることは出来ないからです)。「万人祭司主義」とは、全ての信徒(教会員)が、誰か、他の人を仲保者とせず、聖書を通し、聖霊を通して、直接キリストとつながっているという考え方です。信徒はその様に、自分たちの主体的責任と自主性において、教会形成の業に参与するようキリストから召命を受け、キリストの祭司とされ、教会形成の「主人公」とされたからです。

(e) 訓練の必要性

「万人祭司」の考え方は、容易に想像できますように、信徒が主の訓練に従おうとしない場合には、「自律」を伴わない「自立」として一人歩きをする危険性があります。そうすると、教会形成は御霊ではなく、再び人間の手の下に落ちてしまいます。ルターが中期や後期においてこれをあまり強調しなくなった理由もそこにあります。キリストにつながって自分の信ずるところを主張することは、キリストとの絶えざる祈りによる交わりと、聖書の御言葉による、自己訓練・自己点検を、前堤とします。それらを怠れば、たちまち独りよがりの自己主張と党派主義や闘争主義に陥ってしまうことは、教会史上いやと言うほど何度も繰り返されてきたことです。

その意味において、教会に「聖化」と「召命」の恩寵が増し加えられ、満ち溢れて、「伝道する教会」となるためには、「教会訓練」が必要です。従って、基本的に言えば「訓練」においてその中心となり、効力の源となるものは、説教と聖礼典です。それらに更に教会教育などが加えられましょう。又、訓練者は教職や長老ではなく、ただキリストとその御言葉のみであり、一人一人はキリストとその御言葉の訓練に服することにおいて、自立的に、自己訓練・自己点検を怠らないということが大事です。教職者はその場合、頭なるキリストの教師職にあずかる限りにおいて、言わばその手助けをする助手であると考えたらよいでしょう。長老は、更にその補佐をするにしか過ぎません。

(f) 信徒の役割

最後に、「伝道する教会の形成」について、主として、信徒の役割を中心に考えてみたいと思います。「伝道する教会」がどのように形成されるかという問題で、基本的に重要なことは次の三つしかありません。まず第一に、キリストが教会の「主」であられ、そのキリストに対して全ての者が忠誠心を捧げるようになること。第二に、すべての教会員が教会形成上の「主人公」として召されていることが十分に自覚され、かつ担保されるようになること。第三に、すべての信徒が「奉仕」の務め(御言葉の役者の務めから、ただ病床に伏せる故に祈ることしか出来ない祈りの務めに至るまで、すべてはキリストと兄弟姉妹に対する「奉仕」の務めです)に就くこと。なぜならば、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来た」(マルコ10:45)からです。

長老は教職と共に教会成立上、必要不可欠な「職制」を構成しています。ですから、長老は教会の中の何らかの部や組織(例えば、婦人会や青年会)などの利益代表ではありません。あくまでも、年に一度の教会総会に代わり、教会全体が常時キリストの御声を「聴き分け」て決断するための、教会に不可欠な教会会議(小会)を構成する「職務」です。従って、重要なことは、長老や役員は、牧師と同様、キリストからの厳かな「召命」を受けたという自覚を持つことです。「聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです」(使徒20:28)とある通りです。

(6) 日本における教会形成と伝道

(a) 見えない教会

全体教会について考え、その中で「日本における教会形成と伝道」という問題について考える段になりました。ここでこそ、私たちは、「見えない教会」から「見える教会」の形成を考えるという立場を固く固持しなければなりません。何故なら、「見える教会」は人間の手が加わった歴史的・現実的なものにしか過ぎず、それは絶えず混乱や無秩序やさまざまな脅かしと同居せざるを得ませんが、「見えない教会」は父なる神の全能の御手によって死人の中から甦らされ、高く引き揚げられ、御父の右の座に就かれたお方、「キリストの神秘体」であり、正に「永遠の教会」とも呼ぶべき「聖・一・公同の・使徒的教会」だからです。

(b) 「全体教会」の形成

前節で述べられた「見えない教会」こそが、御子キリスト・イエスの御体なる教会であり、「全体教会」です。その形成は、具体的には、世界教会の一致と、その道程としての伝道協力が考えられます。さて、伝道には伝道協力が絶対に不可欠です。たとえ、自分の属する「部分教会」としての、一個教会だけがどんなに栄えても、それは全くの自己満足にしか過ぎず、主の「大伝道命令」(マタイ28章19節以下)を満たしたことには少しもならないからです。部分教会は、あくまでも全体教会の一部であるにしか過ぎないのです。従って、私たちは、部分教会の形成やその相互の伝道協力を考える上においても、「全体教会」の形成を常に考えなければなりません。それは、「聖・一・公同の・使徒的教会」と呼ばれ、2000年の間信じられてきました。

(c) 公同の教会

日本のプロテスタント教会最初期の教会形成の理念が「公会」であったことは、既に述べたとおりです。それは、2000年前の最初の教会において信じられ、最も尊重されていた、「聖・一・公同の・使徒的教会」、と極めて近いものです。これは、キリストの御体なる教会は、神のものであり、決して、人間の意志によって、「下から」作られたものではなく、三位一体の神によって、「上から」生まれたものであるという意味です。また、それは、すべての民に開かれています。このような、「全体教会」を考えることが、「部分教会」としての一個教会の形成を考える上で、決して忘れてならないことです。何故なら、このような観点が失われたところで、「各個教会主義」が、生まれてくるからです。これを代表するのが、分離主義や、分派主義などという部分教会主義であり、根本的に教会や伝道の本質にそぐわないことは明らかです。

(d) 伝道圏

同じ教会内で、即ち、同じ中会、同じ大会に属する諸教会の間で、伝道協力を模索してゆくことが大事です。そこに出来上がるのが、「伝道圏」の形成です。伝道圏とは、同じ地域の幾つかの部分教会が集まり、その地域の伝道を協力して行う関係を結ぶことです。ただし、この定義の中には、おのおのの部分教会、即ち、顔と顔とを合わせて共に礼拝し、伝道する教会は、基本的には自伝・自立(自律)・自給を目指していることが入っています。この伝道圏伝道によって、さまざまな霊的祝福が期待されます。

第一に、伝道する喜びを、教会が自然な形で共有できるようになります。小教会にとっては、自分たちが、より大きな「伝道圏」の一部である、という安心感が与えられ、大教会にとっては、小教会のために祈ることが課題であるという自覚と喜びが与えられます。

第二に、牧師同士の助け合い、学び合い、説教などの共同研鑽は、若い牧師が、つぶれたり、閉塞感に陥ったりすることから守り、先輩教師にも多くの良い刺激と活動の場が与えられます。周囲の教会の事に心を配り、後輩牧師を育てるようになるでしょう。そのようにして、その地域全体の牧師が生き生きと伝道するようになれば、地域の教会全体が活性化されます。

第三に、キリスト者には主にある交わりの輪が広げられます。「一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばればすべての部分が共に喜ぶ」(I コリント 12 : 26) とある通りです。

(7) まとめ

以上のように考察してきたことは、最終的に、私たちの置かれている道南地区という一つの地区に帰着されると思われまふ。それぞれの教会は、先ず、**自伝・自立・自給**の教会を目指しますが、それが、各個教会のことに留まり、自分の教会の事しか考えなければ、現在の教師不足の状況で、無牧師のまま孤立する教会も生じてしまいます。しかし、各個教会の一人一人の信徒が、召された使命に目覚め、それぞれが、身近な人に伝道してゆくときに、状況は変化して行きます。各個教会が祝されると同時に、必然的に、周囲の教会との関わりが生まれます。それぞれが、教師も含め、協力して行く体制に向かうとき、**伝道圏の考え方が**役に立ちます。

個々の教会のことだけを考えるのではなく、地域の伝道圏にある諸教会のことを覚え、祈り合うときに、為すべきことが見えてくるのではないのでしょうか。今回は、「**万人祭司主義**」ということがキーワードとして与えられ、それぞれの信徒が果たすべき役割に目を開かれました。それぞれが、個人としても自律して行くことが必要であることに目を開かれるのです。その為には、一人一人が御言葉に立つことが必要です。また更には、教会の基本としての礼拝が、生きた御言葉の与えられる場とならなければなりません。礼拝共同体であると同時に、伝道共同体である教会が見えてくると思います。

参考図書

1. 上田光正、日本の伝道を考える 3、「伝道する教会の形成」、教文館、2015年
2. 近藤勝彦、伝道、東神大パンフレット41、東京神学大学出版委員会、2015年
3. 近藤勝彦、日本の伝道、教文館、2006年
4. 島田裕巳、宗教消滅 資本主義は宗教と心中する、SB新書、SBクリエイティブ、2016年
5. 久野 牧、「宣教の新たな展開を祈り求めて」、日本キリスト教会信徒大会「記念誌」、2016年
6. 河野美文、「改革的教会形成」、2015年北海道中会伝道協議会、伝道局報、2015年
7. 秦 利器、「教会における訓練」ーキリストの教会の正しい形成を目指してー、2015年